

第四八話

「君はコレから、どうするんだ？」

空湖さんは、しつかり前を見ながら言った。そう言われても、今日の予定や目的は特に聞いていない。答えに迷っている僕をミラーで見た空湖さんは、「そうじゃなくって」と付け加える。

「身の振り方というか、出処進退というか、君の将来の話だよ。ウチの桂花もだけど、君も一生、ザ・シティの監視下に置かれるんだろう？ 桂花は研究職志望だから、ゆくゆくはザ・シティに関わるとして、君の今後はどうなのかと思ってね」

空湖さんの言いたいことがやっと分かった。フライの落下地点予測もまともに処理できないド文系、この間の期末テストもやっぱ悲惨だったのも判明した今の僕に、その話も答えにくい。追試でなんとかなりそうな雰囲気もあるけど、現役での大学受験は厳しい気がする。

「君のところにも、そういう接触はあるんだろ？」

空湖さんは、僕の目を見て言った。僕は最近の出来事を思い出しながら、口を開く。

「ザ・シティからは来ないですけど、チャルカの方から、次のグレゴールにならないかって打診は何度か来ました」

「次代の監視者か。いいね、似合ってるじゃないか」

空湖さんは、声を出して笑った。彼の脳裏に、あの衣装を纏った僕の姿でも浮かんでいるのだろう。どちらかというと理系集団のザ・シティよりは向いていると思うが、例のベネチアンマスクと、「見張るもの」の名を継ぐのは遠慮したい。

「じつくり悩め、青少年。それが青春さ」

空湖さんが運転席でうるさいぐらいに笑うと、車は駐車場に入った。そこは、陸上競技場の駐車場だった。

空湖さんが車を駐車スペースに入れると、桂花さんがスッと車外に出た。彼女は花束を手に、後部座席のドアを開ける。

「ほら、行つといで」

空湖さんはシートベルトを外しながら言った。彼は、運転席のリクライニングを倒してケータイを取り出した。一人で面喰らっていると、ドアを開けてこちらを見ていた桂花さんにも、「ほら、行くよ」と促された。

彼女に強引に車外へ引きずり出され、二人で駐車場を抜け、陸上競技場の裏へ向かう。左足を撃ち抜かれた桂花さんは、左脚だけケイ素製の脚に取り替えていた。急増つぽい織林刑事の左腕とは異なり、左右のバランスは悪くなさそうだが、まだ完全には馴染んでいない。随分と、歩きにくそうにしていた。

彼女と二人で、お供物の痕跡がなくなった場所に辿り着いた。入駒の存在はなかったものとされているので、ここで彼女が亡くなった事実も覆い隠されている。何もない、人通りの少ないただの道端に、桂花さんは花束を置いた。

彼女が両手を合わせるのを見て、僕も慌てて両手を合わせた。目を閉じて何を唱えるか迷っている間に、桂花さんは目を開けた。彼女は足元の花束を見つめている。

「入駒さんも、災難だよな。昔告白した男と、あんまり喋ったことのないクラスメートの女が並んで、一緒に手を合わせてるなんて」

「あの子は気にしないよ、そんなこと」

桂花さんは僕の方を向いて、「分かっているなあ。全く」と肩をすくめる。急に強い風が吹いて、花束から顔を覗かせている小さな花の花びらが、何枚か散った。

桂花さんは風に吹かれて暴れる髪を手で押さえながら、「次行くよ。次」と言った。僕はもう一度その場で手を合わせ、駐車場へ向かって歩き出した彼女を追いかけた。

空湖さんの運転する車は、ハチ公タワーの足元へ向かった。隣接する公園指定の駐車場へ車を止め、今度は彼も一緒に車外へ出た。江辺野親子に先導され、ハチ公タワーの側まで来る。

僕はつい頭上を見上げ、この間はその上の方まで行っただと、想いを巡らせた。ハチ公タワーの由来も、俺は知ってるんだぜと心の中で思っていたら、大きな金属音に思考を遮られた。音の方へ視線を向けると、空湖さんが中に入るドアを解錠していた。

「さ、行くよ」

彼は自然にドアを開け、ボサつとしていた僕を手招きする。桂花さんは、僕よ

り先の中へ入った。内部は、この前入った時と何も変わらない。こんな感じだったと、数日前を思い出しながら周りを眺めていたら、空湖さんは下へ向かう螺旋階段に足をかけていた。

「何してるの。行くよ」

入ったところから動かない僕を見て、桂花さんが声を掛けてきた。僕は慌てて彼女の背中を追いかける。空湖さんは、階段の先へ進むドアも持っていた鍵で開け、ズンズン下へ降りていく。

彼に導かれるまま階段を降りていくと、その先には広大な墓場が広がっていた。空湖さんは、案内図も見ずにどンドン先へ行く。比較的新しいような墓標の前で、急に立ち止まった。名前は特に掘られていないが、以前、ザ・シティからそんな通知を受けた気がする。

空湖さんは、桂花さんと手分けして、三つの花束をそれぞれの墓標に置いた。奥の方から順番に、入駒、ばあちゃん、駿の墓になつていく。

「地上で抹消された人たちの墓は、ここに移される」

彼はそう言つて、墓標の前で手を合わせた。桂花さんも、それに合わせて手を合わせる。入駒の墓も、ばあちゃんの墓も、市営の墓地にあつたのに、中身はここに移されている。駿はそもそも、最初からここに墓が造られていた。

「越智くんのことだが、お祖母さんのことは大丈夫かい？」

墓標の前で屈んで手を合わせていた空湖さんは、立ち上がつて僕に尋ねた。僕は墓標の前でしゃがみ、入駒、ばあちゃんと順番に手を合わせる。

「海難事故の時に、僕を助けて亡くなったことになつたので、何の問題もないですよ」

僕がまだ小さかつた頃、この近くから乗船する遊覧船で海難事故に遭遇した。

実際は、その時の事故で下半身不随になり、罪滅ぼしも兼ねた僕のヤングケアラー人生は、そこから始まつたのだけだ。

今、家族に刷り込まれた偽の記憶では、ばあちゃんのおかげで助かつたところだけが残り、後の時間は無かつたことになつている。

「そうか。そんな出来事が」

空湖さんは、僕の話聞いて悲痛な面持ちになる。僕は、「もう、随分前のことなんで気にしないでください」と言つた。

駿の墓標の前で、しっかり手を合わせ、目を瞑つて長々とアイツに語りかけた。連れてきてくれた二人に「お待たせしました」と伝え、広大な地下墓地を後にす

る。

ハチ公タワーを出てドアを施錠すると、鍵を持っていた空湖さんは、僕にそれを差し出した。

「持っておかなくて、大丈夫か？」

自由に墓参りをするには必要なものだ。僕は一瞬迷ったが、「要りません」とそれを押し返した。空湖さんは鍵をポケットにしまいながら、「強いな、君は」と呟いた。

その後、週末の現場巡りはサクッと終わり、他に何処かへ立ち寄るでもなく、お昼ご飯だけご馳走になって帰ってきた。江辺野家の玄関、敷居も跨ぐことなく、普通に我が家で晩御飯を食べた。

向こうのお父さんも同伴でお出かけした割に、特にその後の進展はなく、上陸してきた台風も家にこもって難なくやり過ごし、何事もなく追試も終わった。何度かの猛烈な雨の日も過ごし、大規模な土砂災害にも巻き込まれることなく、あつという間に一学期の日程が終わった。

体育館で集まって校長先生のツマライ話を聞き、教室で通知表を受け取って、テツちゃんと「ヤバイ」だの「思ったりヤバくない」だの話をしながら、いつものように渡り廊下を渡ったところで、「じゃあ」と分かれた。

妹の世話からも解放されたけど、結局、どこの部活にも入っていない。連日のようにチャルカ教からの遣いも来るが、適当にやり過ごして帰宅部を堪能していた。

家に帰れば、明日から夏休み。久しぶりにできた自由な時間をどう過ごすか考えながら、下足に履き替えた。外は明るいののに、天気が降っているらしい。せっかく自転車で来たのに、押して帰らねばならない。

気落ちしながら、カバンの中の折り畳み傘を取り出した。色の濃さに少しだけ気分を盛り上げながら、傘を差して外へ出る。左手のグラウンドで、雨にも関わらず、野球部が声を出して白球を追いかけていた。駿の姿も、古谷の姿も、そこにはない。

目を転じると、陸上部も小雨の中、練習に励んでいた。その中に、練習着に着替えた桂花さんも混じっている。彼女は今日も、走り高跳びの練習らしい。ポールと紅白のバー、その奥にある大きなマットに向かって走り出した。新しい脚はパワーが違うのか、以前より助走のスピードが上がっている。いいタイミングで、

バーの手前で踏み切った。

雨粒が日の光で煌めく中、青い空を白いユニフォームが横切った。前は跳べなかつた高さを、易々と超えていく。

見事は背面跳びを決め、桂花さんはマットに沈み込んだ。彼女はマットから出るなり、満面の笑みを浮かべ、自分がやり遂げたことを全身で喜んでいた。他の部員も、彼女の周りを囲って、喜び合っている。

それをフェンス越しに眺めていた僕に気がついたらしく、彼女は「また覗き見？」と、僕に向かって言った。

「甲斐くんのむつつりスケベ」

桂花さんは周りの女子部員と、僕を見て笑った。僕は流石にムツとして、必死に否定する。それを見た桂花さんは、「ごめん、ごめん」と謝った。

「じゃ、またね」

彼女は笑って手を振った。その笑顔に、僕はこれからも翻弄されるらしい。雨が次第に弱まり始める中、僕はグラウンドを背にして駐輪場へ歩き始めた。

(完)

初出 令和四年一月二二日 noteにて公開